

三省堂

ことば の学び

別冊 | No.03



「行書」再発見

——ゆたかな文字生活のために——

香川大学

小西憲一

身の回りの行書

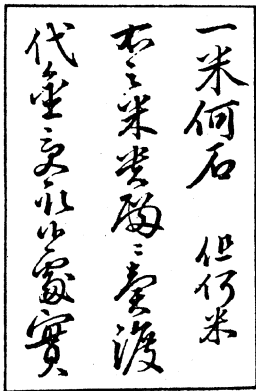
ふと気がついてみると、身の回りから行書らしき文字を探するのが難しくなっている。もちろん、手書き文字を見ることが自体が減少しているのであるから、行書に限った話ではない。一方で、さまざまな商品のパッケージなどに、デザイン化された行書体を見かけることは少なくなっている。しかし昔ながらの手書きの行書体は、もはやペン習字の広告くらいでしか見ることができなくなっている。

行書はもともと楷書という正式書体に対して、一貫して補助書体としての役割を担っているから、本来人目に触れる機会が少ないのは当然である。しかし、学生にある程度の文章を書かせたときや、大学入試の小論文の答案など、速書きが求められる場面においても、行書らしき文字に出会うことは皆無に近い。さらに言えば学生だけではなく、大学の同僚など一般の（書に携わっていないという意味の）社会人にも同様の傾向がある。いったい行書はどこへ行ってしまったのだろうか。

草書の死滅

一昔前、私の祖父母の年代までだろうか、まだ草書は日常生活に生き残っていたように思う。近代の文学者の手紙などには草書が普通に使用されている。それが戦後あたりから急速に失われていった。現代人で草書の読み書きができる人がどれくらいいるだろうか。書道をたしなむ、それもかなり草書を専門的に修練したごく一部の人たちだけだろう。わずか数十年前の日常書体が、もはや古文書解読字典なくしては読めなくなってしまったのである。

これは書写教育の場で草書が扱われなくなっただけである。今では考えられないうが、明治時代中ごろまでは、小学校で



『小学習字本』明治10(1877)年、文受部省発行の教科書(乙第2級)。受け取りの例が学習材になっている。

草書が取り扱われていた。明治末期からの国定教科書時代においても、旧制中学で草書は教科書に取り上げられている。戦前までは、多くの人が草書を学ぶ教育環境にあつたのである。草書が書写の場からなくなり、日常生活からも消えてしまった。現代はそれから一段階進んで、行書が草書に続いて衰退の一途にある。

日本における行書中心主義

日本では、歴史的に見て、楷書よりも行書が重要視されてきた。その一証左が行書先習論である。楷書の前にまず行書から習うべきだとする主張である。その代表的なものに、南北朝時代の尊円親王が書いた『入木抄』という書論の記述がある。

真・行・草字の事

先づ行字を御習ひあるべく候。行は中庸故なり。点を略さずして、筆体を行に書きたるは行の真なり。点を略し、草の字作りをも書き交へて、行に筆を仕ひたるは行の草なり。すなはち、通用稽古のためよろしきな



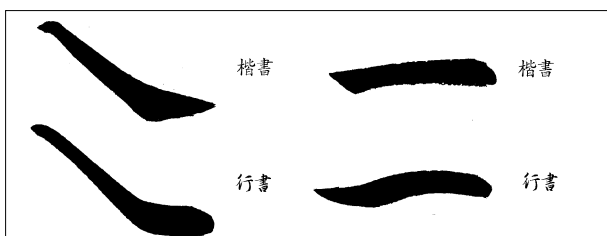
『童訓名數往來』享和3(1803)年刊行の寺子屋で使われた教科書。「夫れ清めるは天と昇り濁るは地と降り」で始まり、「雨露霜雪霰」や「雲霧霞霧」などの字の読み書きが練習できるようになっている。

り。いささか行の字を習ひ得て後、草をも真をも学ぶべきなり。真は行・草に通ぜず、草また真・行に通ぜず候ふなり。真は一々の点を引き放ちてこれを書く。草は点も字も連続して兼ねたる体なり。

簡単に言えば、行書は楷書にも草書にも通ずる書体であるから、入門に適しているということである。

楷書先習の現代では、楷書が基本で行書は発展として扱われるが、行書は実用の書として、長らく文字教育の基本であった。この考え方は、御家流全盛の江

戸時代を経て明治時代初めまで、ほぼ一貫して行われている。明治五年、学制が敷かれ、この時初めて楷書先習が明文化された（とはいえ小学校二年生で行書は扱われている）。明治十四年には再び行書先習となったが、明治三十七年国定教科書において楷書先習となり（行書は主に小学校五・六年生）、現代に至っている。ちなみに昭和三十三年の指導要領によつて、小学校書写から行書はなくなり、中学校でのみの扱いとなった。



言うまでもなく行書先習の考え方は、筆記具が毛筆しかなかった時代に生まれためのである。毛筆以外の筆記用具の急速な普及は、楷書先習・楷書中心の主要因となった。さらに活字中心、印字機器の大衆化によつて、手書き文字の衰退は進み、書写教育における毛筆不要論はたびたび話題となつて

いる。学習指導要領にいう「硬筆の能力を養うための毛筆」は、今実際に理解され、機能しているのだろうか。逆に毛筆があるがために、書写が敬遠されがちになっている現状がある。

毛筆と行書

毛筆は行書と最も相性のよい筆記具である。その機能は、本来楷書よりも行書を書くのに適している。例えば横画と右払いの筆使いを見ていただきたい（上図）。

毛筆は、安定した直線よりも、なめらかな曲線を引くことに向いている。特に右払いの筆使いは楷書の基本点画中最も難易度が高く、毛筆技能においてつまずきの原因の最たる例である。一方で行書の右払いは、途中までは楷書とほぼ同じだが、終筆は横に滑らせて軽く止めるだけで運筆は容易である。平易な行書の運筆によつて、毛筆の機能は理解されやすい。

また、行書における連続を意識したりリズム感や、そのためのさまざまな点画の変化は、毛筆を使用して大きく書くこと

で理解しやすくなる。限られた授業時間内での行書技能獲得のためには、効率的な毛筆使用は欠かせない。

行書指導の留意点

楷書のリズムで速く書くこととすると、字形は乱れやすい。楷書には速書の機能が備わっていないからである。速く書こうとすれば、行書の要素はおのずから文字に現れてくる。

大学での国語専攻学生に対する行書の最初の授業で、いくつかの漢字を活字で示して、楷書と行書で書き分けることを求めると、今の大部分の学生は全く行書が書けない。それで黒板に「口」と書き、これが楷書であつて、「𠂔」は点画が曲線化されているので、立派な行書であると説明すると、納得して自分なりの行書を書き始める。学生の意識では、行書は特殊な書体で、くずし方を知らないと言けない、つまり草書と同等に考えているようである。

行書はもっと身近な書体である。点画の曲線化、さらに筆脈の連続さえあれば、どんな文字も一応行書となる。ここまで

は知識ではなく運動の理解である。行書は一字一字を記憶して書くのではなく、一定の原理を理解した上でリズムに乗って書くのである。よって行書の導入は、形の特徴を記憶させることではなく、リズム感を重視して行いたい。その上で、点画の直接連続や省略のいくつかのパターンを会得していけばよい。

行書が日常的な書体であることは、中学生の段階から理解させていきたい。そのためには、書写の時間内だけの扱いに終わらず、教師がまず積極的に行書を使用して、教室内に行書があふれ、生徒が見慣れる環境を作る必要がある。

これからの行書

現在の義務教育では、行書を学習する機会は中学校においてのみである。そして、多くの人にとって（高校で書道を選択したり、書道を趣味としない限りは）、長い一生の中でのわずか三年間である。さらに、漏れ聞く中学二・三年で書写の時間を確保したい現状を考えると、行書に触れるのは中学一年の内のわずか数時間だけであろう。

このままでいけば、数十年後には行書が書ける日本人はほとんど存在しなくなり、活字に慣れきった目では、読めるのも楷書に近い行書だけということになりかねない。つまり草書の後を追って行書も死滅する。

今後、ますます印字機器が発達していくのはまちがいない。その中で手書き文字はどのように生き残っていくのだろうか。教室内の設備を思い浮かべると、教育機器の進化の一方で、黒板・チョーク・ノートといった昔ながらのほとんど変わらない用具も存在している。速書きに適した行書の存在意義も、当面は失われないうだろう。

また、一歩進んで考えると、書き文字における個性の表現には行書は欠かせない。行書の表現の幅の広さは、人間が生きていく限り必要な署名（サイン）を代表例として、個性の発露に最も適している。昔ながらの毛筆手本至上主義をとる書写教育では、練習した文字以外への応用が期待できないし、ましてや個性は伸長しがたい。行書の一定のルールを会得した上で、十人十色の書き振りがあってよいのではないか。

子どもたちには、一貫して「きれいな字」に対するあこがれがある。それは整った楷書であり、その先には彼らが「つづけ字」「くずし字」などと呼ぶ行書がある。

自分の名前を「かつこよく」「さらさら」と書けるようになりたいと、だれもが思う。しかし、中学高校さらに大学と進むにつれ自分の書く文字への嫌悪と諦めが支配していくようである。

子どもたちの「きれいな字」が書けるようになりたいという欲求に答え、豊かな文字生活を保障するためにも、中学校書写における行書の日常化の取り組みは工夫が求められる。

（こにしけんいち）香川大学教育学部助教授。一九六〇年生まれ。専門は近代篆刻史。教員養成学部において、文字に対する美意識をもち、文字を書く楽しさを子どもたちに伝えられる教師を育てたいと思っています。